

夢追い人列伝

その四 「佐浦益子伝」

初めに

本県バスケットボール競技における先覚者の功績を伝える「夢追い人列伝」シリーズ、四人目に登場いただくのは佐浦益子氏である。

男性中心の風潮著しいスポーツ界にあって、男女共同参画が謳われる以前からその気概を示し、一歩も引かない厳しい指導と女性ならではのきめ細かな気配りで県高校バスケット界に一時代を画した佐浦益子氏の軌跡を紹介する。

佐浦 益子（さうら ますこ）

昭和12年4月生まれ・山口県熊毛郡平生町在住
広島大学教育学部卒業
（一般社団法人）山口県バスケットボール協会顧問
元山口県立高等学校教員（昭和33年4月～平成10年3月）



7月の一夕、平生町の御自宅に佐浦氏を訪ねると、従前と変わらぬ澁刺とした笑顔で迎えていただいた。家の中にはたくさんの洒落た服が並んでいて、聞けば、地域の婦人会で着なくなった和服のリメイクを教えておられるとのこと。各自が自作の服を着てのファッションショーまで企画されたそうだ。曰く、「教員にならなかつたら仕立屋さんになっていた」。颯爽と地域活動に取り組みられる姿は、生徒に常々その大切さを説いていた「普段の生活を整えること」「周りの人への気配り」の具現そのものであった。

1 バスケットボールとの出会い

意外なことに、高校までバスケットボールを手にしたことはない。

小学2年生で終戦を迎えた。その頃は岩国で暮らしていたが、何度かの転居の末に平生町に落ち着いた。事情により叔母の養女となり、寂しい思いもし苦労も味わった。その経験は、佐浦氏の精神的な逞しさと無縁ではないように思われる。

中学時代は勉強好きな生徒で、地域の進学校である柳井高校を目指していたが、学区制が変更になりやむを得ず熊毛南高校を受験した。入学当初「少々投げやりになっていた」ところへ、スポーツテストの後でサングラスをかけた体育教師に声をかけられる。放課後、体育館に行くと、バスケット部が練習をしている横にサングラス先生が立っていた。顧問の谷馨氏だった。昭和26年の広島国体で熊毛南高校をベスト4に導いた名伯楽であることなど、入学したての女生徒は知る由もない。当時、練習の厳しさから2年生は1人だけ、1年生を入部させなければ部の存続が危ぶまれる状態だった。佐浦氏は、言われるままバスケット部に籍を置く。昭和27年春のことであった。もし、柳井高校に進学していたら、バスケットボールや女子体育に関わることはおそらくなかったであろう。

未経験の少女がバスケット競技の面白さに目覚め、めきめきと上達していくにはいくつかの幸運な出会いがあった。最初の出会いは、その高い運動能力を見抜いた谷氏である。二つ目は、教育実習中だった旧姓長迫正氏（故松本正氏。元山口県バスケット協会副会長）で、実習終了後も氏は外部コーチとしてチームを指導し、佐浦氏にボールの握り方からパス、シュートの基本、そしてガードプレイヤーの役割やゲームの流れに至るまで、微に入り細をうがって教え込んだ。佐浦氏は、お陰で回り道をせずにバスケットの本道を効率よく歩むことができたと振り返っている。さらに2年次に、八幡中央高校を九州大会優勝に導いた和佐本生男氏が家庭の事情で転入し、指導に加わるようになった。第三の出会いである。



一つ上の学年の選手が1人という状況の中で1年次から試合の出場機会に恵まれ、2年では中心選手となり、ますますバスケットへのめり込んでいく。そして、秋田インターハイ出場権を見事勝ち取り、本大会でもその活躍で2回戦に勝ち上がった。

3年でキャプテンを務め、チームも県下で無類の強さを誇っていた。インターハイ予選も決勝まで順調に進み、対戦相手は長府高校。ところが、それまでダブルスコアで圧倒していた相手にまさかの敗退を喫してしまう。この敗戦が佐浦氏の進路を大きく変えた。

当時、「西日本大会」という大会があり、インターハイ予選2位のチームに出場権が与えられていた。大会は1月開催だが、後輩のためにもこのままでは済まされないと心を決めた佐浦氏は、正月返上で練習に打ち込んだ。大会後は一転して猛勉強に取り組み、広島大学合格を手にする。文武両道を貫いた精神力は、生来の資質に環境が培ったものでもあろうが、教員になってバスケットを指導したいという強い思いも影響した。教職の道を選ぶ決断は、高校最後の夏の夢がかなえられなかったことがきっかけであった。

この間のいきさつは、「優れた指導者にめぐり逢えて」と題して県協会60年史『夢を追う』に掲載されている。

2 光高校バスケット部

大学を卒業し、久賀高校で保健体育科教員のスタートをきる。プレイヤーとしては、強豪校のOG中心に編成された“一般女子チーム山口”に加わり、国体中国ブロック予選等に出場していた。当時はまだ教員女子チームもなく、昭和38年の山口国体に向け強化が始まった頃であったが、結婚や出産で山口国体に出場することはなかった。

久賀高校から柳井商業高校、熊毛南高校上関分校、光高校へと転勤し、女性体育指導者としての道を歩む。一時期バレー部の指導に携わった他は、教員生活の大半をバスケットの指導に費やした。最後に勤めた光高校での在職年数は実に24年間に及ぶ。

光高校転勤は昭和49年で、前任の吉規喜代二氏（元高体連バスケット専門委員長）が下松高校に転出した1年後であった。着任早々に県予選で2位となり中国地区大会出場権を獲得する。この時、体育主任に「佐浦さん、これが最初で最後かも知れんから、まあ頑張ってきてなさい」と言われた。当時、二人の小学生を抱えていた上に老齢の父親の介護もあり、家庭的にも厳しい時期であったが、この一言が闘志に火をつけた。高体連バスケット専門部の機関誌『南風』に寄稿された「気がつけばこの道40年（以下、「この道40年」）」で、氏は「この言葉が私を奮い立たせ続けた」と述べている。

ただ、その後の大会では2位にはなるものの、届きそうで「優勝」に届かない。佐浦氏は、卒業生の進学先の大学に活路を求めた。連休と長期休暇を活用して、九州、岡山、神戸方面の大学を訪問し、新たな指導法を模索して歩いた。成果は徐々に現れ、着任7年目の秋に県体で初優勝。8年目の冬には県新人大会を制して久々に中国大会に出場し、さらに10年目の昭和59年度は、中国新人大会で準優勝に輝き全国選抜大会出場の道が開けた。当時は3月開催だった選抜大会は、中国地区は上位2校にだけ出場権が与えられる狭き門で、県内ではそれまで宇部女子高校（現慶進高校）と長府高校の2校しか出場していない。「組合せと運に恵まれた漁夫の利」（「この道40年」）という謙遜は、しかし当たらない。快挙の裏には人知れぬ精進があったはずである。

苦節十年、昭和60年、ついに県高校総体で優勝し初のインターハイ出場権を獲得する。県予選決勝は対長府高校。奇しくも高校3年時に敗れ進路にも影響を及ぼした因縁の相手であり、佐浦氏にとっては実に30年ぶりの雪辱となった。氏は、ようやく胸のつかえが取れたに違いない。翌年も決勝戦で長府高校を制し、2年連続出場を果たした。



昭和60年石川インターハイ

当時の高校女子は、光、長府両校に加えて岩国・宇部の有力校が覇を競っていたが、そこに割って入る形で台頭したのが小松徹監督率いる三田尻女子高校（現誠英高校）である。

平成3年から佐浦氏が定年となる平成9年までの間、全国大会（インターハイ、ウィンターカップ）の予選決勝は、光高と三田尻女子高の対決に田丸暁監督の高水高校が絡む構図となった。中国地区大会の決勝戦においても、両校は何度も優勝争いを演じている。

小松氏は、佐浦氏との出会いを振り返ってこう述べている。

「小松先生、選手の涙にごまかされちゃあいけんのよ。女の子は、しぶといんじゃから」。昭和59年に三田尻の監督になって2年目、初めて光高校の体育教官室に恐る恐る足を踏み入れた私に、開口一番かけてもらった佐浦先生のお言葉である。選手はもとよりだが、特筆すべきは先生が目となり手となるマネージャーを厳しく指導されていたことである。チーム作りの原点である「しつけ教育」の徹底を目の当たりにし、以降、少しでも近づきたいと県大会、中国大会でお会いする度にお話を伺った。何に対しても妥協されない非常に厳しい先生ながら、誰に対しても「あたたかさ」を忘れない方もあった。佐浦先生との出会いがなければ、その後の三田尻も小松もなかったと今もって感謝している。

インターハイに通算6回出場し、平成5年と9年には3回戦進出でベスト16入りを果たしている佐浦氏も、ウィンターカップ（全国選抜大会）には縁遠かった。昭和59年度に初出場の後、小松三田尻と予選決勝で相まみえること5度に及び、特に佐浦氏の最後の年となった平成9年の決勝はテレビ中継までされ一進一退の大接戦を演じたものの、武運拙く勝利の女神を振り向かせることはついにかなわなかった。

佐浦氏は多くの指導者の門を叩いたが、中でも名古屋経済大学の新井春生監督にはこのほかお世話になったという。佐浦氏が高校生の時、新井氏は全国に名をはせた強豪・安

来高校（島根県）を率いており、そのベンチ姿が目に焼き付いていた。佐浦氏がそう伝えたことから縁が生まれ、その後も折にふれて指導を仰いだ。さらに、全国大会常連校や実業団チームの指導者とのネットワークを次々と築き、当時の女子日本リーグの両雄、共同石油・中村和雄、シャンソン化粧品・中川文一両監督の下にもチームを帯同し、直接指導を受けている。やがてそれは全国高校総体ベスト16という成果に結実する。こうした人脈の広がり、勝利を貪欲に追い求める氏のひたむきさがもたらしたものに違いない。

昭和60年には、山根浩一氏（現県協会専務理事）が新任教員として光高校に赴任する。2年目からバスケット部に所属してスタッフ2人体制となった。平成3年に、山根氏の転勤に伴い安下庄高校から中村浩正氏（現県協会強化委員長）が着任してあとを引き継ぐ。中村氏は、佐浦監督を支え続けて平成12年に母校・豊浦高校に転勤するが、当時は教員団や国体成年男子チームのポイントゲッターとして活躍していた。

若き日に佐浦氏の薫陶を受け、今は県バスケット界を牽引する立場の両氏は、バスケットの指導法、勝負への執着心、生徒指導、教師の姿勢、体育人としての在り方など多くのことを教わったと口を揃えて語る。佐浦氏も二人のサポートを得て、「中国大会優勝」と「全国ベスト8入賞」という目標を掲げチーム強化に励んだ。全国各地へのバス遠征も力となり、一つ目の目標は平成8年に達成する。それも、中国新人大会に続いて中国選手権大会も制覇してのものだったが、二つ目の目標には結局わずかに届かなかった。

氏の指導はオンザコートにとどまらず、部員の生活態度や礼儀作法にとりわけやかましかった。結局はそれがプレイにも反映される。人間教育とバスケットの指導は一体であった。光高卒業後に実業団や国体などで活躍した藪内祐美子氏（昭和60年卒、現姓石井）は、入学早々、試合後にメソメソしていると「泣く暇があったら次のことを考えなさい！」と叱りとばされ、「生活能力のない人はコートでも踊れない」と言われ続けたことが忘れられない。「先生から教わったことの大切さは、社会人になってから身に染みて分かりました」と語り、地元に戻ってから光高の合宿に同行した際に、いくら先回りしようとしても佐浦氏の気配りや対応に追いつくことはできなかったと苦笑する。



佐浦氏を囲んで（2016年夏）

一方で佐浦氏は、生徒の自主性も重んじた。昭和49年に着任した時の光高校は、1年間指導者不在の中で、能力豊かな選手らが敏腕マネージャーを中心に練習からゲームまで組み立てるチームだった。氏は、感嘆しこの自主性は引き継がせたいと考えた。その真骨頂が発揮されたのは、昭和60年の石川インターハイに初出場を決めた時である。佐浦氏は、「この道40年」でこれを「光高物語」と称している。総勢39名の部員が選手と応援団に別れ、水面下で綿密な計画が練られていた。第1・第2マネージャー、応援リーダー、小道具係などの「とりしきり屋」がコート内外を力づくで支える。選手の中にコーチ役が決まっており、チーム一丸となった光高校は、準決勝の宇部女子高戦で奇跡的とも言える勝利を手にした。いや、「勝利に向けて一直線まっしぐら」だった39名の部員は、奇跡ではないときっぱり言い切ったそうである。そして、その勢いのまま悲願のインターハイ切

符を手にし「物語」は大団円を迎える。氏は回想で、「抱えている生徒に教えられることの多い指導者でした」と生徒を称賛している。

県内で名が知れわたっていくにつれ、現有戦力では全国で満足に戦えないという厳しい現実に直面する。氏は選手の育成に打って出た。市内の中学校と連携し、中学生の指導に力を注ぐ「種まき」に着手したのである。また、ミニバス講習会で講師を務めるなど、言わば「地ならし」も手がけた。こうした地道な努力が実を結び、昭和61年、平成3年、5年のインターハイ出場時には手塩に掛けた選手らが活躍し、特に平成5年の小山インターハイでは3回戦で全国区の強豪・樟蔭東高校相手に10点差まで詰め寄る原動力となった。

『夢を追う』はこのベスト16入りにふれ、「光高校の中心選手である池田朋子選手は、大学に進学後はユニバーシアードチームに選抜され国際大会で活躍した」と記している。卒業生の教え子などの高い素質を持った選手が集まり始め、サイズのある有力選手も入学するようになる中で迎えた平成9年の京都インターハイでは、3回戦で湘南女子高を6点差まで追い詰めるも、残念ながら念願のベスト8にあと一歩及ばなかった。



3 女性指導者

「家庭をもち、妻や母となったら監督業は厳しい。あなたには難しい仕事だよ」。ライバルチームの監督などから何度となく言われた言葉である。耳にする度に、佐浦氏はきっと見返してやると闘志をかき立てた。同じような立場の女性指導者同士で声を掛け合い、励まし合った。選手に勝利の喜びを味わわせたいという気持ちに、男も女もない。

国体少年女子チームには多くの選手を送り出したが、監督を務めることはなく、藤崎佳史子氏（元宇部商業高校監督）とともにサポート役に徹してチームを下支えした。自校もライバル校もない。選手のコンディショニングを一手に引き受け、その甲斐あって平成8年の広島国体で少年女子は準優勝の栄冠に輝く。佐浦氏と藤崎氏は陰の立役者であった。佐浦氏にとって、年は離れていても藤崎氏は気心を通じた同志であり、共に県代表チームに貢献できたことを誇りとしている。



広島国体準優勝メンバー（平成8年）

佐浦氏は、退職5年前に山口県女子体育連盟を立ち上げ、バスケットに限らず広く女子体育の振興発展に尽力してきた。「これからの女性指導者に必要なものは」と尋ねると、得意種目を極めることとともに新たな領域への挑戦と周囲との調整力ではないかと言われ、道を極めるためには何かを犠牲にする覚悟もいると付け加えられた。

また、女性指導者の育成には身近にモデルがあるとよく、早いうちからリーダーシップを身に付けさせ、指導の資格が取得できる進路に導くのが望ましいが、家庭を持てば子育て

てなどで足踏みする期間もあり、それを本人も周囲もよく分かってほしいという言葉には実感がこもっていた。

師の後を追った教え子に上田康代氏（昭和56年卒、現姓中谷）がいる。音楽教師の志を胸に光高に入学したが、佐浦氏のもとでバスケットに打ち込むうちに夢は体育教師となってバスケットを指導することになった。いざ教員になってみると、佐浦氏の大きさを改めて知るばかりであった。平成30年の山口全中出場チームに久保中学校の名を刻むことができたのも、先生の背中を追いかけてきたからこそ、感謝の念は尽きない。

それにしても、現在、学校現場における女性のバスケット指導者はごく少数である。佐浦氏を一つのモデルとして一人でも多くの女性指導者の登場が望まれる。

4 出会い・感謝

これまで本県高校バスケット界で、女性監督が全国大会に臨んだケースは他にない。それを何度も果たした佐浦氏の胸には、人との出会いに恵まれたという深い思いがある。熊毛南高校に始まり、節目節目で優れた先達、理解ある支援者や上司と縁を結び、バスケット人生を切り開くことができた。人生行路の中で、めぐり合いが重なったこともある。高校時代の長迫コーチは、初任の久賀高校で先輩教員として面倒を見てもらった。3年次にインターハイ予選決勝で戦った長府高校の白松寿人監督とは、国体チームのスタッフと選手として再会した。そうした例は枚挙にいとまがない。氏の成長の糧になった出会いの連鎖は、一つひとつの邂逅をおろそかにしないその人柄から生まれたもののように思える。

さらに、いつも家族や周囲の人々の支えがあった。

夫君の綾男氏は同じくバスケットが専門の高校体育教師で、自身も若い頃から教員団に属して活躍し、自校チームの指導を初め高体連や県協会の運営に尽力された最大の理解者である。「育てられた覚えはない。育てあげたんだ」。娘さんにはそう言われると氏は笑うが、二人ともミニバスから高校までバスケットを続けたので、家庭が籠球一色になってむしろ救われた面もあると眼を細められた。

昭和60年3月、全国選抜大会出場を目前に父親が緊急手術となり、練習コートと自宅に病院をかけ持ちする毎日となった。卒業生の全面的な手助けと保護者の協力のお陰で事なきを得たが、それがなかったらと考えると今でも背筋が寒くなるそうである。

この年の6月、県総体での初優勝は、OGの川口加代子氏（昭和55年卒、現姓水田）の献身的な助力抜きには語れない。栄冠を目指して心を砕いた二人三脚の日々は、タイムアップの瞬間抱き合って喜んだこととともに鮮やかに胸に刻まれていると佐浦氏は語る。

光高校と言えば佐浦先生、佐浦先生と言えば光高校、色褪せることなく今もそう語り継がれる。卒業生、同僚教員や同窓会、地元の有志など各方面からの熱い支援が佐浦氏と光高バスケットボール部を盛り立ててきた。氏は、いただいたあたたかい支えに頭が下がる、感謝の言葉しかないと言懐されるが、その人柄と行動力に引き寄せられた方々ばかりであろう。「佐浦先生と出会えて本当によかった」という言葉を何度も耳にした。

終わりに

最後に、藤崎佳代子氏の手記の一部を紹介してしめくくりにさせていただく。ここには、佐浦氏の実像が余すところなく語られている。

教員団女子チームの先輩でもあった佐浦氏は、雲の上の存在で、あこがれでもあり目標でもありました。でも思い切って敷居を踏み越えてみると、そこには本当に暖かいリビングがありました。家庭人としての家族への愛情、教育者としての教え子や関係者への惜しみない細やかな心遣い、地域人としてのしなやかな活動等があふれていました。そこには、コート上では決して見ることはない顔がありました。

もちろん、大変厳しい方でした。勝負に対しても、生徒の指導に対しても、学校の仕事に対しても、一切抜かりも手抜きもありません。バスケットボールを通して「良き人」を育てると言うポリシーをお持ちでした。また、女性体育人としての使命にも全く妥協なしでした。特に、光高校の卒業生たちから聞くエピソードの中には、預かった生徒に対する責任への決意と覚悟をひしひしと感じ、圧倒されました。まさに、スーパーウーマンです。

その根底にあるのは、女性としての優しくも逞しい矜持であると確信しています。それは、あの暖かいリビングから、勝負をかける大きなコートまで、ずっと一筋につながっていたように思えてなりません。

佐浦氏は、優秀な選手を輩出し誉れある戦績に輝く卓越した指導者であり、同時に女性指導者の先駆けとしても本県バスケットボール史に確かな一ページを刻んでいる。抜きがたい苦境にも敢然と立ち向かい乗り越えさせたのは、内に秘めた熱い心、周囲の人々への深い愛情、そして、「女性としての優しくも逞しい矜持」だったに違いない。

今は、綾男氏が過ごされる施設に足繁く通いながら、御自宅で得意な裁縫や地域の諸活動に情熱を持って取り組んでおられるが、その貴重な経験を踏まえ、今後とも大所高所から本県バスケット界を見守り、叱咤激励をお願いする次第である。

[文責：顕彰事業委員会]